僕がかわいがるから

小川未明

青空文庫

正ちゃんの、飼っている黒犬が、このごろから他家の鶏を捕ったり、うきぎを捕ったりして、みんなから悪まれていました。こんどやってきたら、鉄砲で打ち殺してしまうといっている人もあるくらいです。けれど、正ちゃんは黒犬をかわいがっていました。

「クロや、もう僕といっしょでなければ、出さないよ。ひどいめにあうからね。」と、いってきかせました。

クロは、尾を振って、正ちゃんの体に頭をすりつけて、クン、クンと喜んで鳴いていました。

「わかれば、もういいのだよ。僕は、おまえをかわいがってやるから。」と、いって、クロの頭を抱えて、その顔に自分のほおをつけていました。

しかし、お父さんや、お母さんは、クロを捨ててしまうといっていられました。そして、相談をなさっていられたのです。

「なにか、正二のほしいものを買ってやれば、いうことをきくかもしれない。」と、お父さんは、おっしゃいました。

「さあ、どうでしょうか。二輪車をほしいといっていましたから、犬を捨てたら、買ってやるといってみましょうか。」と、お母さんは、お答えなさいました。

「ああ、それがいい、きいてみてごらん。」と、お父さんが、いわれました。

お母さんは、さっそく、正ちゃんに、そのことをおっしゃいました。

「おまえの好きなものを買ってあげるから、クロをだれかにやっておしまいなさい。」と、おっしゃいました。

すると、正ちゃんは、即座に、

「僕は、なにもほしくないから、クロをやることはいやです。」と、お答えしました。

「上等の二輪車を買ってあげても。」

「二輪車なんか、ほしくありません。」

「いつか、ほしいといったでしょう。」

「それは、ほしいが、クロをやってしまうことはいやです。」

お母さんは、考えていられましたが、正ちゃんが、いつか、野球のミットをほしいといったことを思い出されました。そこで、こんどは、

「ミットも買って、あげるけど。」と、おっしゃいました。

ミットときいて、正ちゃんは、お母さんの顔を見ました。

「ミットも買ってくれるの?」と、お母さんに、ききかえしました。

「ミットも買ってあげます。」

お母さんが、こうお答えなさると、正ちゃんは、頭を振って、

「ミットなんか、ほしくない。」と、いいました。

「じゃ、犬をやめて、伝書ばとになさいな、はとは、やさしくて、そんな悪いいたずらをしませんから。」と、お母さんは、おっしゃいました。

「え、伝書ばとを飼ってくれるの?」と、正ちゃんは、目をかがやかしました。

「ええ、鳥屋へいって、買ってきてあげますよ。」

「二輪車とミットと伝書ばとを買ってくれない?」と、正ちゃんは、大いに欲張りました。

「さあ、お父さんが、なんとおっしゃるかしれませんけれど、そう

したら、正ちゃんは、クロを捨ててしまいますね？」と、お母さんは、念を押されました。

「どうしても、クロを捨ててしまうの、かわいそうだなあ。だれかにやってしまえばいいではないか。」と、正ちゃんは、考えていました。

「それは、聞いてみますが、あんなに大きくなった犬をだれも、もらうものはないでしょう。遠くへつれていって、置いてくるのですね。」

　このとき、正ちゃんは、クロと約束したことを思い出しました。僕は、おまえをかわいがってやるからといったことを思い出しました。

「僕、いやだ、やはり、クロを飼っておく。」と、きっぱりといいました。

「伝書ばとはいらないんですね。」と、お母さんが、おっしゃいました。

　伝書ばとときくと、正ちゃんは、また迷ってしまいました。犬もいいが、あのかわいらしい目をしたはともほしかったのです。それに、はとは卵を生むからよけいいいのです。

「お母さん、僕、考えてみていい？」と、正ちゃんは、いいました。

「ああ、よく考えてごらんなさいね。私も、二輪車に、ミツトに、伝書ばとですから、考えてみなければなりません。」と、いって、お母さんは、笑っていらっしゃいました。

　正ちゃんは、草の上に横になって、大空をながめながら、

「はとと二輪車にしようかなあ、しかし、クロがかわいそうだし……。」と、いって、考え込んでいました。そして、考えに疲れて、そのまま目を閉じて、じっとしていると、自分を探しにきたクロが、ハッ、ハッと、息を切って、頭のところへ走ってきたけはいがしました。

「こうして、死んだふりをしていよう。」と、正ちゃんは、思いました。

　クロは、正ちゃんの頭をかぎました。つぎに顔をなめました。正ちゃんは、おかしくて、しようがなかったけれど、我慢をしているとクロは、なんと思ったか、――ほんとうに死んだと思ったのか、急に悲しそうな声を出して、ほえはじめました。そして、また正ちゃんの顔をなめ、起こそうと着物をくわえて引っ張ったのです。正ちゃんは、はね起きました。

「クロ！　僕は、こんなにやさしいおまえを捨てようなどと思って悪かった！　堪忍しておくれ、もう、いつまでもかわいがって、どこへもやらないから。」と、いって、二人は、草の上で元気よく、相撲を取って遊んだのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　11」講談社
　　1977（昭和52）年9月10日第1刷発行
　　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店
　　1936（昭和11）年12月
初出：「台湾日日新報」
　　1936（昭和11）年5月22日
※表題は底本では、「僕《ぼく》がかわいがるから」となっています。
※初出時の表題は「僕が可愛がるから」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2016年6月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

僕がかわいがるから

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/